イェシェー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠—寺本婉雅旧蔵—』刊行に寄せて

R. オトゴンバータル（モンゴル科学アカデミー言語文学研究所）
松川　節　訳補 i)
三宅　伸一郎　解説

解　説

本稿は、真宗総合研究所西蔵文献研究班（以下本研究班）が 2019 年 11 月 21 日に開催した公開講演会における講演原稿の翻訳であり、本研究班が 2019 年度刊行した『イェシェー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』：寺本婉雅旧蔵』に対するコメントをその内容としている。この仏教史は、1835 年にイェシェー・ペルデン（Ye shes dpal ldan 本稿ではそのモンゴル風の呼称であるイシバルダンという呼称が使用されている）により著されたもので、チベット語版とモンゴル語版が伝わっている（モンゴル語版の題名は『エルデニーン・エリヘ（*Erdeni-yin Erike*）』）。本研究班が刊行したものは、そのチベット語版のテキストであり、寺本婉雅（1872–1940）が所蔵していた 36 フォーリオからなる木版本を原本としたものである。刊行にあたっては、チベット語テキスト内に対応するモンゴル語版デンマーク王立図書館所蔵写本のフォーリオ番号を示した。また、日本語・チベット語による解題を「序」として付した。本稿は、本研究班の研究では十分に得られなかった本仏教史の著者イェシェー・ペルデンに関する情報や、モンゴル語版の諸写本に関する情報、さらにはチベット語版とモンゴル語版との対照がなされている。いわば、本研究班の研究成果を補うものであり、その有益さに鑑み、ここにその和訳を発表することとした。

著者のオトゴンバータル P. Оттонбаатар 氏は、モンゴル国を代表する歴史文献学者であり、モンゴル語・チベット語文献を専門としている。とりわけ、パ

スパ文字、ソヨンボ文字で書かれた文献に関する研究での第一人者である。三宅は、モンゴル国立大学との研究協力協定に基づく共同研究の研究報告会が行われた 2016 年の 11 月に、松川の紹介で、モンゴル国の首都ウランバートルで初めて面談する機会を得た。モンゴル人によるチベット語の利用について様々な質問を行った際、「チベットの文化を受け継いでいるのはモンゴル人だ」との趣旨のことを話されたのが強く印象に残っている。

本稿で示されている情報に対して、二、三の見解を述べておきたい。本仏教史刊行の際、その「序」の中で三宅は、本仏教史の著者イェシェー・ペルデンについて、道光帝の時代（1821–1850）に成立した五台山の聖地案内書『明瞭な鏡』（*Ri bo rtse lnga'i dkar chag rab gsal me long*.［文殊道場五台山志］, Zi ling: mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang, 1994）の著者ジュニャーナ・シュリーマン（Dznyāna shrīman, イェシェー・ペルデンのサンスクリット語による名称）と同一人物の可能性があるということしか指摘できなかった。これに対し本稿では、S. ゴンボジャブ・ハンバや S. ナルスン、トゥムルバータルら現代のモンゴル人たちによる情報が提示されている。そのうち、S. ナルスンとトゥムルバータルによる情報は、具体性に富んでおり魅力的であるが、注意が必要に思える。この情報の中で、準格爾旗の大路鎮にあったガーダルミィン・スム、すなわちチベット語でラーシゲペルリン、漢語で経廣寺との名を持つ寺院はイェシェー・ペルデンによって建立されたとされている。「ラーシゲペルリン」というチベット語名はモンゴル風の呼称であり、本来は「タシーゲペルリン（bKra shis dge 'phel gling）」と言うべきであろう。ところが、本仏教史の奥書に「自身が住持するタムチョー・タルギェーリン（Dam chos dar rgyas gling）付近のサンガク・ラプギェー宮（Bla brang gsang sngags rab rgyas）にてよくまとめた（rang gnas dgon pa dam chos dar rgyas gling gi nye 'dab kyi bla brang gsang sngags rab rgyas su legs par bsgrigs pa）」と、彼が住持した寺院として、「ラーシゲペルリン」でも「タシーゲペルリン」でもない「タムチョー・タルギェーリン」との名が明記されている。自身が建立した寺院と住持した寺院が異なる場合もあるため、この一点を以て、イェシェー・ペルデンが「ラーシゲペルリン」ないし「タシーゲペルリン」を建立したとの情報を完全に否定することはできないが、疑問は残る。興味深いことに、本仏教史第 2 部「仏教などがいかに広まったかを説く（rgyal bstan sogs ji ltar dar ba'i tshul bshad pa）」後半にあるモンゴル寺院リストの中には、「ラー

シゲペルリン」「タシーゲペルリン」の名も、さらには奥書に見られる「タムチョー・タルギェーリン」「サンガク・ラプギェー宮」の名は見られない。ともかく、本仏教史の著者イェシェー・ペルデンの事績については、今後とも歴史文献の情報と口頭の情報とを注意深く精査し、検討していく必要があろう。

本仏教史の開版地について本稿では、内モンゴルの「おそらくオルドス地方で」と述べられている。残念ながらその根拠は明確に示されていない。内モンゴルにおける「木版本の古典的実例」として、ダルマタラ＝タムチョー・ギャムツォ（Dharma ta la Dam chos rgya mtsho）が 1889 年に著した『大モンゴルの地に正法がいかに発展したかを説く「白蓮華鬘」（*Chen po hor gyi yul du dam pa'i chos ji ltar dar ba'i tshul gsal bar brjod pa padma dkar po'i phreng ba*）』（本稿では「ダルマダラの『ホル・チョエジュン』」と表記されている）が挙げられている。この仏教史書の木版本の影印は、*Dharmatala's Annals of Buddhism*.（Reproduced by Lokesh Chandra, Śata-piṭaka Series: Indo-Asian Literatures, vol. 225, New Delhi: Sharada Rani, 1975）と題して刊行されている。通常、チベット語の木版本では、各フォーリオ番号が、表側の左マージンに示され、裏側には示されない。ところが本仏教史では、表側と裏側の両方の左マージンにフォーリオ番号が示されており、これが書式上の特徴となっている。上記ダルマタラ（ダルマダラ）による仏教史の木版本も、同様の書式を有する。この共通した書式こそが、内モンゴルにおけるチベット語木版本の特徴なのであろうか。

本仏教史のチベット語版・モンゴル語版の先後関係、換言すれば、どちらが原本でありどちらがその翻訳であるのか（もちろん、著者イェシェー・ペルデンが両言語で同時に執筆したと考えられなくもない）という問題について、本稿では断定を避けているように思われる。チベット語版・モンゴル語版の詳細な対照が行われていない現時点で、この態度は然るべきであろう。本仏教史刊行に際し、その「序」の中で、本仏教史に見られる「チベットの経本」「モンゴルの経本」を意味する「bod chos」「sog chos」という、他のチベット語文献には見られない特徴的な語句を取り上げ、これがそれぞれ「töbed nom」「mongγul nom」というモンゴル語からの翻訳である可能性を指摘し、チベット語版・モンゴル語版の先後関係については保留した。本稿の中で、チベット語を書くことに慣れたモンゴル人の書くモンゴル文語は、チベット語に相当捉われている特徴を持つという趣旨の指摘がなされている。その逆はあり得ないの

だろうか。モンゴル人の書くチベット語がモンゴル語に捉われないのかという点も検討していく必要があろう。

いずれにせよ、本仏教史の本格的な研究を進めるにあたっては、本稿で最後に指摘されている「モンゴル語・チベット語異本を完全に見渡し，一字一句を校訂したクリティカル・テキスト」の作成が、必須の作業であることに間違いはない。

＊　＊　＊

はじめに

モンゴルの学僧たちの一人であるイシバルダン[ii]という僧侶は『エルデニーン・エリヘ』と略称される歴史文献を著し、チベット文字とモンゴル文字で流布してきた。このたび、著者について、また原本の諸異本を比較した点について、やや詳しく検討してみよう。

なぜならば、私はこの著作を特に研究することに関心をもつ歴史家ではないが、ほんの数年前に東京で開催されたオンドゥルゲゲーン・ザナバザル Өндөр гэгээн Занабазар 創作の２つの文字についての会議に私が参加した際に、旧知の学友である松川氏も共に参加した。会議の際に我が学友は、一つのチベット語の木版本の標題部分の写真を一瞥させ、「我が日本の地から百年以上前にチベットとモンゴルの地を最初に目指した人々の一人である寺本氏の蔵書にこのような書が見つかっている。内容を比定すべき書物のようだ」と、短時間に一言二言を交わしたところ、私が「ハイシッヒ氏が出版した年代記と比較すればよい」というふうに言ったことは、幸いなことに的中することとなった。かくして、この書物について、再度、些かながら明らかにする報告を行うという責務が小生に回ってきたというのが経緯である。

著者の略歴

ハンチン・ハンバ・パンディタ・イシバルダンは、オルドス Ordos 出身の人である。この僧侶について S. ゴンボジャブ・ハンバは「22. イシバルダン。オルドス旗[iii]のハンバ・パンディタ。19 世紀の人で、5 巻の著作を有する。モン

ゴル史と習俗、写本[1]」と、60年前、1959年に報告していた。

内モンゴルの学者S. ナルスン、トゥムルバータルらは2000年に、「ガーダルミィン・スム Γadarma-yin süm-e。この寺は現在のズーンガル Jegün gar【準格爾】旗 qosiγu のイフザム Yeke ǰam・ソム sum【大路鎮】のゾーギーン・ゴル・ガツァー Juu-yin γoul γačaγ-a にあった。清朝の乾隆時代（1736-1795）にガーダルミィン・ゴル Γadarma-yin γoul という地に本寺のシャブラン・ラマであるイシバルダンが最初に建立した。チベット名はラーシゲペルリン Раашгэпэллин、漢語で経廣寺という……　18世紀末～19世紀初頭に生きていた本寺のゲゲーンのイシバルダンという大いに徳を持つ人物がいた。彼は経版を巧く刻む技巧を有し、生涯に百以上の経巻を印刻した。このほか、またモンゴル史研究に関わる『ガーダルマ・ゲゲーン[iv)] 全集 *Γadarma gegen-ü sumbum*』、『エルデニーン・エリヘ』などの書を著した。彼の刻した木版を、抗日戦争時代に国民党軍が燃料として焼いた。『ガーダルマ・ゲゲーン全集』という書を1940年ごろにオラーンツァブ Ulaγančab 盟 ayimaγ のドゥルベド Dörbed 旗 qosiγu のフレン・ダワー Küren dabaγ-a のゲゲーンやラマ僧に筆写させていったという情報がある。『エルデニーン・エリヘ』という書は現在、内モンゴルの社会科学院図書館に保存されている[2]」と記したのである。

以上の2つの資料以外に、著者イシバルダンの履歴に関する情報は、我々に得られていない。一方、イシバルダン師の他の著作については、オルドス Ordos 出身の古老である雍和宮の管長ジャミヤントゥブデン Жамъянтүвдэн, ’Jam dbyangs thub bstan 氏の談話によると、チンギス・ハーンの祭祀と関連する書を著したという。

本書の概要

このモンゴルの歴史と宗教に関する手ごろでハンディな著作は、チベット語とモンゴル語で、版本と写本の異本によって流布してきた。完全な書名は『モ

1　Гомбожав, С., “Монголчуудын төвөд хэлээр зохиосон зохиолын зүйл”, *Studia Mongolica*, II боть, IV өгүүлэл, Уб, 1960, 26 дугаар тал.

2　Sa. Narasun, Temürbaγatur, *Ordos-un süm-e keyid*. (Mongγol ündüsüten-ü süm-e keyid-ün čubural V) Qayilar, 2000, 12-13 duγar tal-a.［薩・那日松・特木爾巴特爾　『鄂爾多斯寺院』（蒙古族藏傳佛教寺院大全5）海拉爾（内蒙古文化出版社）2000］

ンゴルの地にハーンの系統と宗教が広まり、宗教の保持者と文字を創始し、寺院などがいかに現れたかという由縁を説いた宝の数珠ありき』という。

本著作のモンゴル語異本は、木版で出版されていないようであり、ただ写本で各地に保存されている。本書はモンゴルのハーンの系統、宗教の歴史、文字についてや、寺院が建立されたことなど、相当多くの情報が含まれているため、学者たちが引用したことは少なくない。例としてモンゴルの学者 D. ペルレー[3]は、古い歴史文献の一つとなっていることについて、内容などをかなり詳しく述べており、Sh. ナツァグドルジ[4]は、有名なロ【ブサンダンジン Лувсанданжин の】『アルタン・トブチ *Алтан товч*』の著者を決定する見解を述べる際に言及しており、アカデミー会員の Ts. ダムディンスレン[5]は、「千年比較表」という著作において、「……1835 年にオルドスの僧侶イシバルダンが『エルデニーン・エリヘ』という歴史書を著した」とし、また、内モンゴルの学者ヒシグトグトホ[6]は、チョイジ・オドセルの文字について言及する機会に、イシバルダンの『エルデニーン・エリヘ』がチベット語とモンゴル語の二言語で広まったことを示唆した。同様に、『モンゴル人民共和国史』一巻本と三巻本を 20 世紀半ばにモンゴルの学者たちが著す際に、本書を利用したのである。

Ya. ツェベル[7]はモンゴル公立図書館にある一写本について 1937 年に言及した。彼が歴史文献類という部分で「11.847. エルデニーン・エリヘ、0、モンゴル、2、33、写本、モンゴルの古代のハ（ー）ンの続系を明らかにした記録」と記したのは、モンゴル語で著された 2 冊、33 葉であることを示しており、本登録の略号で示したものである。残念ながら、著者と著作年代については記されなかった。

L. S. プチコフスキー[8]はペテルブルグの東洋学研究所に一写本があることを

3　Пэрлээ, Д., *Монголын хувьсгалын өмнөх үеийн түүх бичлэгийн асуудалд*. Уб, 1958.

4　Нацагдорж, Ш., “Алтан товчийн зохиогчийн тухай.” *Шинжлэх ухаан техник*, Уб, 1958, 53 дугаар тал.

5　Дамдинсүрэн, Ц., А. Лувсандэндэв, *Орос-Монгол толь*. II дэвтэр, Уб, 1969, 917 дугаар тал.

6　Kesigtoγtoqu, Č., *Mongγol-un erten-ü udq-a jokiyal-un sin-e sudulul*. Kökeqota, 1998, 518 duγar tal-a.［策 · 賀西格陶克陶　『蒙古古典文学研究新論』呼和浩特（内蒙古人民出版社）1998.］

7　Цэвэл, Я., *Улсын номын сангийн азийн ангид бүхий монгол ангийн бичмэл ба дармал ном бичгийн бүртгэл*. 1937, 2 дугаар тал.

8　Пучковский, Л. С., *Монгольские рукописи и ксилографы института Востоковедения*. 1957, 58-60 дугаар тал.

1957 年に報告した。これは、その研究所の豊富な蔵書内の歴史・法律などの三百あまりの文献の詳細な素晴らしい目録の 30 番目に『エルデニーン・エリへという書』という名前で登録された。その際、有名なガルダン・トスラグチ Галдан туслагч の『エルデニーン･エリへ』とは別の､トイン･ハンチン･バンディと呼ばれるところのゲレン・イシバルダン Тойн ханчин банди хэмээн дуудагч гэлэн Ишбалдан の著作であると、全内容を、詳細に葉数を示して記したのである。原本の大きさは 24.5 × 12.5 センチで、毛頭紙に 7 行立てで記した 81 葉からなる。全部で 1,143 行前後である。これは、縦型の 2 冊子に書かれた百余りの葉数の写本である。

デンマークの首都コペンハーゲン市の王立図書館に本書の 2 つの写本があり、そのうちの 1 つを選び、W. ハイシッヒ [9] は 1961 年に出版したのであった。該書の序文に、デンマークの学者 K. グリュンベクが 1938 ～ 39 年のあいだにツァハル Цахар 地方から確かに得たことについて報告されている。ハイシッヒ氏が出版した原本は、一葉に 12 行、筆で書かれた大判縦型の冊子本である。紙型は 43 × 21 センチで、書写面の大きさは 25.5 × 16 センチであると、W. ハイシッヒと Ch. ボーデン [10] は書誌情報として記している。これは大型の紙に記されたため、全部で 936 行である。別の出版されずに残った冊子は、やや小型で、26 × 25.5 センチの方形の冊子に 18 行で書かれた 35+2 葉であるという。だいたいの勘定によると、1260 行前後の写本である。これもツァハル地方から得たものである。

内モンゴルの学者スレグ [11] は【この書を】チベット語原本から漢語に翻訳し、1989 年に出版した。漢語を解する読者・研究者に供与するにあたり、内モンゴル社会科学院に保存されていたチベット語の木版で出版された原本に依拠して翻訳したという。

モンゴル国の学者 D. ブルネー [12] は、2006 年に『モンゴル歴史文献叢書』の

9　*ERDENI-YIN ERIKE Mongolische Chronik der lamaistischen Klosterbauten der Mongolei von ISIBALDAN (1835)*. (Monumenta linguarum Asiae maioris, Series nova, Bd.2), Kopenhagen: Ejnar Munksgaard, 1961.

10　Heissig, W., Ch. Bawden, *Catalogue of Mongol Books, Manuscripts and Xylographs*. Copenhagen, 1971.

11　耶喜巴勒登（著）苏鲁格（譯注）『蒙古政教史』北京（民族出版社）1989.

12　Бүрнээ, Д., *Ишбалдан Эрдэнийн эрих*, Уб, 2006, 2014 ;『益希巴拉丹《寶鬘》』呼和浩特（内蒙古教育出版社）、2017.

第19巻として本書の最初の出版をした。この出版においては、ハイシッヒ氏が以前に出版したモンゴル語原本【のみ】を利用しており、チベット語の異本は見ていないため、この種の政治宗教史であるスンパケンポ・イシバルジル Сүмбэ хамба Ишбалжир, Sum pa mkhan po Ye shes dpal ’byor、トガン・ロブサンチョイジニャム Туган Лувсанчойжиням, Thu’u bkwan Blo bzang chos kyi nyi ma らのチベット語の歴史文献をかなりよく利用し、かなり多くの注釈を付して出版したのである。一方、2014年にウランバートルで再版するにあたり、序文の部分に少し補足を加えた。また、2017年に内モンゴルで再度出版される際に、同じ原文に学術ローマ字転写を付し、単語索引を伴わせた。

内モンゴルの学者ソノム[13]氏は、【内モンゴル自治区】蒙古語文歴史研究所のツェン・オイドブという古老が1957年にチベット語からモンゴル語に翻訳した原本とハイシッヒ氏が出版した異本の2本を校閲して2007年に出版した。出版に際して、1ページ以上の序文の中に、多少校訂したことについて述べているが、冒頭部分などから見て、後代の翻訳を利用しているけれども、やはり、出版されたコペンハーゲンの原本を主として利用している。

三宅・松川ら[14]は2019年に *hor gyi yul du rgyal rabs dang rgyal bstan ’dzin yig bzos dgon sde sogs ji ltar byung tshul bshad pa rin chen ’phreng ba zhes bya ba bzhugs so.* という書名で、日本語とチベット語の序文、チベット文字フォントによる新たな文字起こし、木版本の写真を付して出版した。これは、本物のチベット原本を初めて一般に供与した重要な作業である。短期間に出版に準備する際に、新たに文字起こしをしただけでなく、チベット語原典の葉ごとの表裏を行数とともに緻密に示し、若干の語句の誤りをも注釈において正したという良い点があり、さらにチベット木版の若干の薄れた版面を再構して示している。また、モンゴル語原本と緻密に校勘し、マークを付けるべき位置にモンゴル語原本の葉の表裏を明確に示している。この経典はおそらくオルドス地方でチベット語木版で開板されたため、内モンゴルの兄弟たちの伝統的な木版本の興味深い実

13　Sunum, *Ordos tulγur bičig: Odoki kelen-ü debter* (douradu), Begeǰing, 2007.［曹納木　『鄂爾多斯文献 今譯本』（下）北京（民族出版社）2007.］

14　三宅伸一郎、松川節、伴真一朗、アリルディー・ボルマー、更蔵切主（共編）『イェシェー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』―寺本婉雅旧蔵―』大谷大学真宗総合研究所・西蔵文献研究班 2019、京都。

例の一つとなっている。

さて、ちなみに、バーリン Баарин 地方の学僧ダルマダラ Дармадала, Dharma ta la Dam chos rgya mtsho の『ホル・チョエジュン *Хор чойнжун, Hor chos 'byung*』すなわち『モンゴル【仏教】史』もまた木版で出されていることは、バーリン地方の木版本の古典的実例である。このようなモンゴル史と関わる書のみを木版で刊行していたのではなく、それらとともに、少なくない大小の経典を印行していたことは明らかである。イシバルダンのチベット語歴史文献の【左】マージンに「kha」とあるのを、三宅・松川らは、第２巻の書物であるとみてよいとしているのは正しい。一方、私が付言すれば、いずれかの巻の第二冊であるか、あるいは下巻として並べられた可能性があることに喚起を促しておこう。

今までに全く公表されず人々に行き渡らなかったモンゴル史の新たな重要な一文献を、外国のモンゴル・チベット研究者が、学術的序文、原本の高品質の写真とともに良書となして多部数を刊行したことは、モンゴル学・チベット学者だけでなく、我がモンゴル史の愛好者にとっても重要な寄進となるのである。

モンゴル語・チベット語異本の校勘の概略

現在、上述のようにモンゴル語とチベット語の２つの原典を有するようになったことは、校勘する者にとって最善のことである。しかしこの両原典のどちらの言語で最初に著されたについて、まったく証拠が得られていない。ただ、【三宅・松川ら】編纂者たちの瞥見によれば、モンゴル語原本はチベット語からの翻訳形式の語であるという意見のみが開陳されていると言ってよい。しかし、チベット語の【広い意味での】文学がモンゴルの地に強く深く浸透した最近二百年間に含まれる時代に書かれた作品であるため、若干のチベット語著作者のモンゴル文語も、チベット語に相当捉われている特徴を持つことに留意する必要がある。

この他、我々は各地に存在するモンゴル語・チベット語の木版本・写本の全異本を緻密に校勘すれば最も有効であることは明らかである。例えば、1937年に出版された登録目録に掲載されたモンゴル国立図書館所蔵のモンゴル語原本は、26 × 25.5 センチの大きさの毛頭紙の 21 × 20 センチの範囲に一葉あたり 16 行を筆で書き、黄布で外装した二冊本で、第一冊は 16 葉、第二冊は 17 葉、計 33 葉の写本である。『エルデニーン・エリヘという』【erdeni-yin erike kemekü】という外題のこの異本もまた古き良き時代の原本である。しかし第６

葉裏に ter ber とある後、aldarsiγsan-ača までの一葉分、第 10 葉裏に rinčinpal という名詞の後、negen ǰildür までの一葉分が失われ、さらに第 11 葉裏おいて二箇所、合わせて半ページ分を抜かして筆写したため、大量の脱落を有する異本となっている。

この写本は一般に広まっているデンマーク国の写本と同じ原典を利用して筆写した異本である。これら 2 つの写本はそれぞれの筆写者の特徴により、筆写の過程における正書法および理解の正確さから若干の差が生じている。しかし語の選択と編集上の差はほとんど無いばかりか、書物のなかごろで一葉を並べ間違えて書写した深刻な錯簡までも同じである。

原典の写真が無いにしても、2 つの原本を校勘したソノム氏の出版も、ある面では意味の上で校勘するのに役立つ異本である。ソノム氏はチベット語から翻訳した写本を利用して公刊したため、上記の 2 写本が葉を逆順に書き写した深刻な錯簡を訂正したという良い面がある。しかしそれでも数少ない語句の誤脱が見られる。

筆者が校勘した若干の例を以下に示す。

モンゴル国所蔵原本	デンマーク国原本	内モンゴル出版本（ソノム）	チベット語原本
eke inü 2e7	eke ber 2e8	Эх ни 843	mas 3e4
γomdaǰu 2e9	γomdaγad 2e9	Гомдоод 843	ma mnyed de 3a4
esen luγ-a 8e12	asan luγ-a 10a9	Эсэнтэй 855	e sen 10a4
gem bükün-i 14e10	gem bükün-i 18a10	Гэмтэйг мэдэж 869	skyon can du17e3
arban ǰil 15a3	tabun ǰil 18e5	Таван жил 869	lo lnga 17e6
nasungküldi 15a10	nisüküldi 18e11	Агсагалдай 870	a sa gvo ta 18a3
qaγan samar qamtu γutul 21a7	qaγan yamar qamtu γutul 24e9	Гахайн хамарт гутал 879	phag sna’i lham 23e6
quvbaraγ 26a8	30e 9 /гэргийтэн/	Хүмүүс 887	khyim pa 29a1
binai 26a9	vini 30e10	Винай 887	’dul 29a1
barγutan naiman qosiγu 32a5-6	baraγunta naiman qosiγu 38a4	Баргуд найман хошуу 897	p’ar god tsho ba brgyad 35a6
baraγunta-yin orun 32a8	baraγunta-yin orun 38a6	Баргудын орон 897	p’ar god kyi yul 35e1

こうした若干の例を示すことができる。しかし暫時さし措いて、他のモンゴル語・チベット語異本を完全に見渡し、一字一句を校訂したクリティカル・テキストを準備し、完璧な研究を公表することを後世の学問の後輩たちに託し、この論考を終わらせたい。

訳者註

ⅰ）本稿において訳者が補った部分は【　　】で示す。

ⅱ）本稿本文では、元著者の表記に従い、チベット語名イェシェー・ペルデン Ye shes dpal ldan のモンゴル語表記イシバルダン Isibaldan を用いる。また、モンゴル語の固有名詞の表記においてキリル文字によるものとローマ字によるものが混在しているのは参照の便を図ったものである。

ⅲ）「旗」は内モンゴルにおける行政単位。「郡」に相当する。また、その下に「ソム」があり、「鎮」に相当する。

ⅳ）「ゲゲーン」はモンゴル語で「高貴な人」の意味で、化身仏を指す。